

(34)

| | | | | |
|-----------|--------------------------------------|---------|---------|--------|
| 氏名(生年月日) | シ 清 | ミズ 水 | タダ 忠 | オ 夫 |
| 本 籍 | | | | |
| 学 位 の 種 類 | 医学博士 | | | |
| 学位授与の番号 | 乙第786号 | | | |
| 学位授与の日付 | 昭和61年11月21日 | | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者) | | | |
| 学位論文題目 | 乳癌におけるCEA測定の臨床病理学的意義—組織CEA量を中心として— | | | |
| 論文審査委員 | (主査)教授 羽生富士夫 (副査)教授 香川 順, 教授 梶田 昭 | | | |

論 文 内 容 の 要 旨

目的

乳癌組織においてCEA量の高値症例が認められるが、その臨床病理組織学的意義について詳しく検討した報告はみあたらない。そこで、乳癌組織CEA量を測定し、臨床的、病理組織学的意義について検討を試みた。さらに、血清CEA値との関連、組織CEA染色との関係を見ることで、組織CEA量測定の意義についても検討した。

対象および方法

検索対象は東京女子医科大学第二病院外科で過去3年間に癌組織のCEA量および血清CEA値を測定しえた原発乳癌90例である。組織CEA量は乳癌組織の一部(0.5g)を採取し、そのcytosolを、Roche CEA Radioimmunoassay Kitを用い測定した。組織CEA量と病理組織学的検索項目および血清CEA値陽性率との関係についてカイ二乗検定を用い検討した。予後との関係はKaplan Meier法による累積生存率をみた。組織CEA染色はDAKO社製 Peroxidase-antiperoxidase (PAP) Kitを用い、組織CEA量と比較した。

結果

1. 組織CEA量の陽性率は35.6%であった。組織CEA量から血清CEA値陽性率をみると、組織CEA量陽性例に高くなった。

2. 組織CEA量の陽性率は、脈管侵襲陽性 ($p < 0.05$)、腫瘍径 T3以上 ($p < 0.01$)、リンパ節転移の程度 $n1\beta$ 以上 ($p < 0.005$)、stage II~IV ($p < 0.01$) の症例に高くなった。また、組織CEA量から血清CEA

値陽性率をみると、組織CEA量陽性例で、脈管侵襲陽性、腫瘍径 T3以上、リンパ節転移の程度 $n1\beta$ 以上、stage II~IV に高くなった。

3. 組織CEA量、血清CEA値ともその陽性例で予後不良となった。また、予後良好であった血清CEA値陰性例でも、組織CEA量陽性例は生存曲線の低下がみられた ($p < 0.01$)。

4. 組織CEA量と組織CEA染色の関係を見ると、組織CEA量0.5ng/mg以下では染色されず、5.0ng/mg以上では全例に染色された。

考察および結論

乳癌取扱い規約で規定される諸因子について、その進行した症例に組織CEA量の陽性率は高くなった。本来、CEAを産生する乳癌とそうでないものがまったく生物学的に同じであるならば、組織CEA量の陽性率は一定の値をとるはずである。しかし、自験例では、組織CEA量の陽性率は進行した症例に有意に高かった。このことから、CEAを産生する乳癌の進行は早く、より悪性であると考えられる。このことは組織CEA量陽性例は陰性例に比べ、明らかに生存曲線の低下が認められ、予後不良であったことから証明される。また、従来より予後良好であるとされる血清CEA値陰性例でも、組織CEA量陽性症例で有意に生存曲線の低下を認めた。組織CEA量を測定することより、より正確な予後を予測することができるものと考えられる。

論文審査の要旨

本論文は乳癌の組織 CEA(Carcinoembryonic Antigen)量の測定を行ない、血清 CEA 値との関連、組織 CEA 染色との関係、および臨床病理学的諸因子との関係を検討した結果、組織 CEA 量の測定が乳癌の生物学的悪性度、ならびに予後推定の指標となりうることを明らかにしたもので、学術上価値あるものと認める。

主論文公表誌

乳癌における CEA 測定の臨床病理学的意義—組織 CEA 量を中心として—
東京女子医科大学雑誌 第56巻 第9号
843~855頁 (昭和61年9月25日発行)

副論文公表誌

- 1) S 状結腸捻転症の臨床的研究
大腸肛門誌 36 (1) 40~44 (1983)
- 2) 組織型別にみた浸潤癌通常型乳癌の検討
日臨外会誌 45 (6) 706~710 (1984)
- 3) 乳癌における各種腫瘍マーカーの臨床的意義について
外科 47 (5) 512~516 (1985)
- 4) 扁平上皮乳癌の1例
東京医大誌 55 (5) 476~478 (1985)
- 5) Recklinghausen 病および Idiopathic hypertrophic subdortic stenosis (IHSS) を合併した乳癌の1例
東女医大誌 55 (12) 1080~1084 (1985)
- 6) 乳癌における核内エストロゲンレセプターの検討
乳癌の臨床 1 (1) 137~140 (1986)
- 7) 数量化理論II類による乳腺外来患者の疫学的因子の検討
乳癌の臨床 1 (1) 103~104 (1986)
- 8) 75歳以上高齢者乳癌の検討
外科 48 (5) 494~496 (1986)
- 9) 電子内視鏡による消化器疾患の診断と治療 第1報 上部消化管電子内視鏡の使用経験とその将来性
東女医大誌 56 (3) 256~262 (1986)